

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

化粧品などに見るハラールの拡がり、「信頼」

砂井紫里（さいゆかり、早稲田大学イスラーム地域研究機構・研究助手）

「そこが問題なのよ！私はずっと日本の化粧品を愛用してきたけれど、ある時、胎盤を使っているということを知って、それは私にとってハラール（ハラル）ではないから、使うのをやめたの。その化粧品は、とてもよかったのだけれど。」

マラヤ大学での打ち合わせが終わり雑談をしていた時、化粧品の使用について話題になった。直接、肌や粘膜に接するものだから、その使い心地や効果ともに化粧品もハラールなものを使いたい、と彼女は語る。

肌に直接つけるスキンケア・化粧品、口腔に使うマウスウォッシュ・歯磨き粉、ベビーパウダーなど赤ちゃん用品といったパーソナルケア商品についても、マレーシアでは国内のハラール規格「MS 2200:PART 1: 2008」が設定され、規格に準じた認証を取得した製品にはハラールロゴがついて商店に並んでいる。その規格は、食品と同様に、原材料から調整・生産過程・流通・機材・包装・ラベルの全過程でのハラール性が認証の要件となっている。

ありとあらゆる製品にハラールのマークをつけることに懐疑的な声もあるが、消費者団体やハラール関連機関では、化粧品やパーソナルケア商品に特定の動物や人体由来などムスリムにとって禁じられた成分が含まれている可能性があることを消費者に注意を促している。冒頭の女性の場合は、化粧成分に含まれるコラーゲン原料の胎盤が動物由来のものであったので、彼女にとってはハラールではないということだった。一方、化粧品を選ぶときには、そもそもその製品がハラールかどうかは考えないというムスリム女性も多い。

今春に開かれた国際ハラール見本市（MIHAS）においても、各国の食品・飲料や原材料・包装機材等と並んで、健康食品や化粧品・精油・香水などのブースが並ぶ。いくつかのブースで製品とハラールについて話を聞いた。ココナツオイル製品のブースでは、自然素材、身体に良いことを全面に出し、ハラールの証書を机の上に展示していた。肌・頭皮・口腔への添付のほか、飲むことで甲状腺や高血圧、内臓疾患にも効果があるという。「ハラール認証の申請過程は工場の監査、原材料の詳細、モニタリング等、手続きがとにかく面倒くさくて、時間がかかるけれど、ハラール認証を獲得することで、私たちは消費者の信頼を手に入れるのよ」と販売員のナットラーさんが教えてくれた。「信頼」は、製品やサービスにおけるハラールを考える上でのキーワードのひとつといえよう。『The Halal Frontier』の著者である Johan Fischer はハラールのブランド化について、「マレーシアのハラール規格およびそれに基づく認証の獲得は、商品のハラール性と同時にハラールでないものからの汚染リスクの軽減を保証する」と指摘している。

アロマ製品の製造と自社の製品を用いたスパを営む女性は、ハラール認証を現在申請中であり、認証獲得までにはまだ時間がかかるが、製品は無添加・自然由来・有機でとても良いものであることを強調した。

製品のラベルやチラシなどでも、有機・自然由来・無添加・アルコール不使用・香料不使用・動物実験なしなどのことばが並ぶ。健康や肌に良いこと、高品質と並んで、こうしたことばもまた製品の魅力を増し、消費者の「信頼」を導いている。これらのことばは、ハラール製品に限らず、非ムスリム消費者向けの製品でも共通することばであることはいうまでもない。より良い、好ましいとされる価値観がハラールに接合していく。化粧品やパーソナルケア用品におけるハラールは、食品以上に非ムスリム消費者にとっても、親和性が高く、共感し易いものなのかもしれない。



MIHAS2013におけるプロモーション（筆者撮影）

< 筆者紹介 >

1974 年、東京生まれ。早稲田大学早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。専門は文化人類学。食べ物・食事と社会関係をベースに、日常の暮らしと世界とのつながりについて考えています。ここ数年は、ハラールをめぐる営みの多様性に関心をもって各地を歩いています。主著に『食卓から覗く中華世界とイスラーム』（2013 年、めこん）など。